

## 雪を旨とする住まいの豊かさ

日本の北陸地方の町は、世界で最も積雪量が多い。新潟県の中山間地では、家を建てるにあたり、雪を第一に考えてきた。生活の中で蓄積された知恵と経験が住まいの形に現れている。

### 1. 新潟県十日町市の農村集落の雪処理

十日町市小脇（旧川西町）は渋海川沿いの農村集落。山麓に沿って屋敷が並ぶ。住居の裏側斜面には、緩い上がり勾配の穴が掘られている。横井戸と呼ばれる。そこからの地下水は住宅内に引かれ、流しや風呂で使われる。また、住居裏口の近くにつくられた池（タネンボ）にも導かれる（図1）。このタネンボは台所に近いため、食器の下洗いや果物の冷却に使われる。

タネンボは裏口近くのほかに、主屋の背面（ウラ）、主屋の側面、主屋とナヤの間にもつくられている。いずれも深さ10センチほどしかない。勾配に沿って、横井戸の水が順番に送られている。主屋背面のタネンボは、農作業から戻った際の農機具や靴の泥を落とすために使われる。主屋側面のタネンボは、苗代や蓮田として使われる。その上澄みが主屋とナヤの間のタネンボに流れる。ここはザシキの縁側の正面にあたり、鑑賞庭の要素となっている。

冬季には、すべてのタネンボが融雪池として使われる（図2）。水深が浅いため、地下水が停滞しない。主屋背後のタネンボには、炊事や風呂水も流されるため、屋根から落とされた雪を早く融かす。また、主屋側面と前面のタネンボは、土嚢で一体的に堤防が廻され、その水は軒下近くまで溢れる。屋根の入り隅部分から落とされた雪を融かす。主屋背後のタネンボは軒先の雪を地面の雪と分ける。主屋内の裏側に位置する居間（カッテ）の高窓から雪の反射光が入る。主屋の足下は雪に覆われており、隙間風は塞がれ、室温は一定に保たれる。

### 2. 新潟県上越市高田の雁木町家の雪処理

町家は平入り、屋根は前後に下る。間口が小さく、奥行きが深い敷地。主屋（ホンヤ）を道路に面して建て、裏庭を広く確保する。主屋（ホンヤ）の裏側には、裏側棟（ロウカ）が突き出る。トオリニワの突き当たり裏庭への出口がある（図3）。

城下町高田は17世紀初めにつくられた。山麓から離れており流水は多くない。雪の降る前に、雁木と土縁と窓に雪囲いをする。屋根には滑り止めの丸太（ナゼドメ）1間おきに差し渡す。居間（チャノマ）の板戸の滑りが悪くなると各戸で雪下ろしをする。裏側のロウカの雪下ろしから始める。ウラニカイからコシキを持ってロウカの屋根に出る。雪を裏庭に落とす。トオリニワから裏庭に出て、雪をロウカより裏側に寄せる。ロウカの壁と離して雪の壁をつくる（図4）。

つぎに、トオリニワから、台所に収納された梯子と雪樋1枚（長さ1間、幅1尺半）を持って、雁木下に移動する。雁木下に吊られた雪樋2枚を合わせ、雁木に立てかける。梯子で雁木の上に登り、雪樋3枚を引き上げ、さらに梯子でホンヤの前側の屋根に登り、雪樋3枚を屋根上に引き上げる。軒先に立てた梯子を支点として雪樋を載せ、コシキで切り取った雪を通りの中央に滑り落とす。軒先の雪を落とすと、雪樋をつなげて棟側の屋根雪を通りに滑り落とす。3枚雪樋をつなげ、棟より1間裏側の雪まで通りに落とす（図5）。

表側の屋根雪を除けた後、棟越しに梯子と雪樋を裏側に移動する。雪樋を斜めに渡し、屋根雪を裏庭に落とす（図6）。その後、梯子と雪樋を雁木屋根裏と台所に戻し、裏庭の雪を雪壁の上に乗せる。通りの雪も裏庭の雪も、春に大鋸で切り、櫓で川へ運んだ。積雪が3mを超えると、近隣住民で銭湯、小学校、日用品店の前に雪にトンネルを掘った。

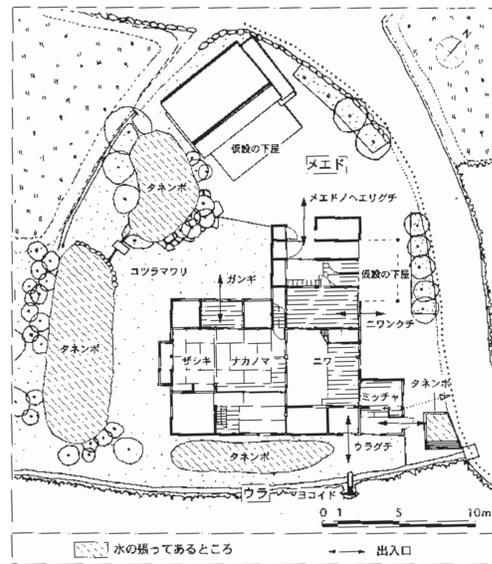


図1 夏の屋敷構え 独立したタネンボ

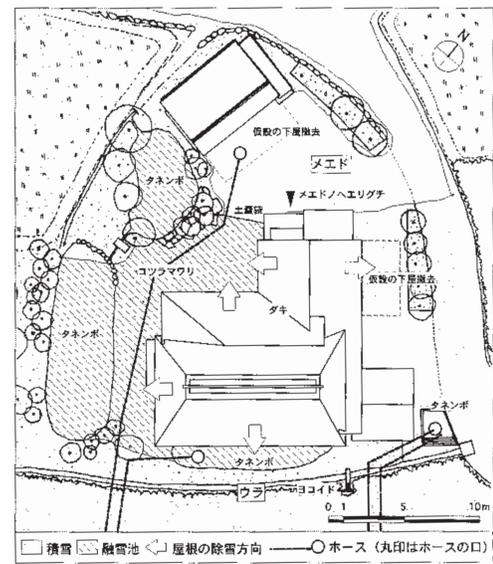


図2 冬の屋敷構え タネンボの連結

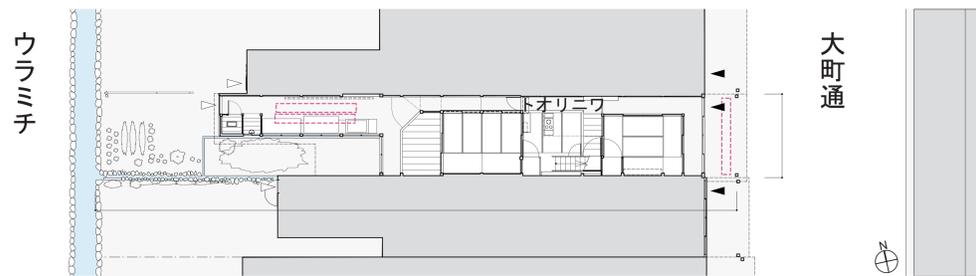


図3 表と裏をトオリニワでつなぐ雁木町家

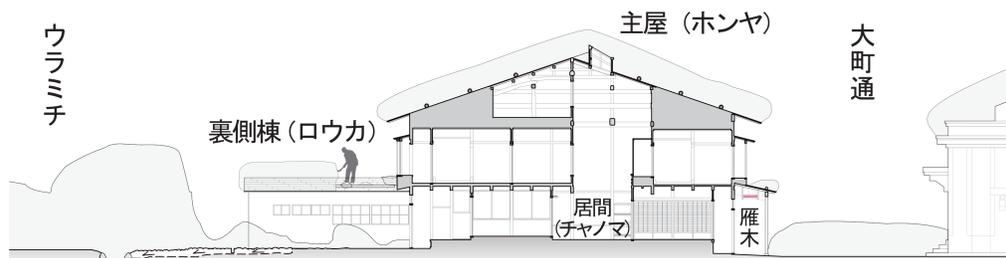


図4 ロウカの雪下ろしと裏につくられた雪の壁

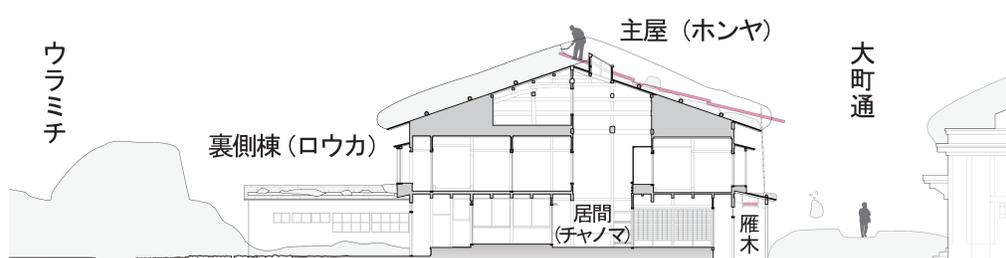


図5 梯子と雪樋を用いた表通り側の屋根の雪下ろし

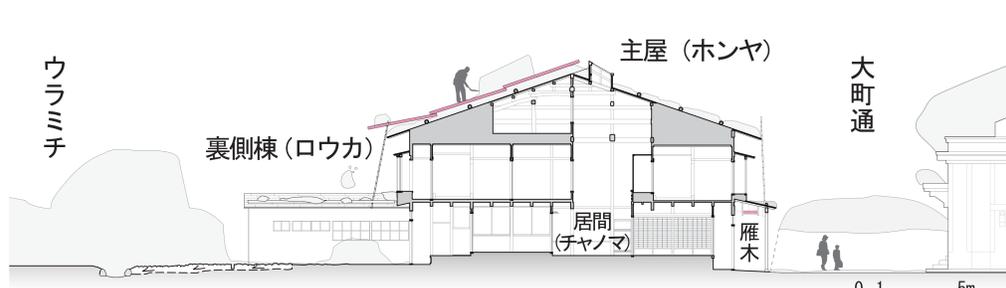


図6 裏庭側の屋根の雪下ろしと雪のトンネル

写真1 上越市高田：雁木下に収納された雪樋

